

認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク ニュースレター 2020年12月15日発行

サロベツ原野だより Vol.14 -No.3

ホームページ URL <http://www.sarobetsu.or.jp>

E-mail: info@sarobetsu.or.jp

〒098-4100
北海道天塩郡豊富町
字豊富西6条6丁目
TEL/Fax (0162)82-3950



目次

- 1. お知らせ……………P.1
- 2. 活動報告
 - (1) 稚咲内砂丘林の現状……………P.2～3
長谷部 真
 - (2) セイヨウオオマルハナバチ講習会 ……P.4
川崎 正大
 - (3) ONSEN・ガストロノミーウォーキング
in 豊富（フットパス）……………P.5
嶋崎 暁啓
- 3. コラム
 - (1) サロベツ今昔物語……………P.6
野口 多美治
 - (2) とよとみの民話……………P.7
豊富高校 郷土研究部編
- 4. 事務局からのお知らせ
 - (1) 湿原センター情報……………P.7
早野 佳織
 - (2) サロベツ四季の旅……………P.8

1. お知らせ

スノーシューレンタル情報

今シーズンもいよいよ、スノーシューの季節を迎えます。当法人では湿原センターを拠点にガイドツアーのほか、用具レンタルも行っています。詳しいレンタル料は下記をご覧ください。ぜひ白銀の世界へお越しください！

※最新の積雪情報は湿原センターまでお問い合わせください。

○スノーシュー（男性・女性・子供用）

半日 550 円、1 日 1,100 円

○長靴（男性・女性用 23～28cm）

半日 220 円、1 日 440 円

○スキーウェア（男性・女性用 S～L サイズ）

上下セット 1,100 円



2. 活動報告

(1) 稚咲内砂丘林の現状

長谷部 真（豊富町・NPO職員）

稚咲内海岸砂丘林（以後砂丘林）は天塩川河口から稚内市夕来までの海岸沿い南北に約 30kmの砂丘の上に連なる林で、波打つ砂丘の窪みに湖沼が点在します（図 1）。この砂丘が昔海だったサロベツを堰き止めたため、そこに堆積した泥炭により湿原が形成されました。



図1 稚咲内海岸砂丘林（豊富町）

砂丘林は利尻礼文サロベツ国立公園に指定されているだけでなく、北海道自然環境保全指針で浜里海岸が「すぐれた砂丘・浜」に、稚咲内（砂丘・風紋）が「日本の典型地形」に指定されています。砂丘林の林にはトドマツ・エゾマツ・アカエゾマツ・ミズナラ等の巨木林があるため、オジロワシ・クマゲラが繁殖します。湖沼には水鳥が渡りの中継地として利用しており、アカエリカイツブリや日本ではこのみとなるミコアイサが繁殖します。

過去には砂丘林の周辺の牧草地化と張り巡らされた排水路により砂丘林の湖沼の水位の低下や沼の枯渇が起きました。幌延町にある海岸側には国立公園に指定されていない部分があり、ここでは現在も砂の採取が行われ、砂丘林が日々失われています。さらに国立公園の際まで砂を採取したことにより、隣接する林の立ち枯れや湖沼の水位低下・枯渇が起っています。また浜里地区では国立公園の特別保護区にごく近い場所での新たな風車群の建設が始まっています。

私たちは日本野鳥の会（2018-2019 年）の事業やほくー基金の助成金（2020 年）を利用して、砂丘林におけるミコアイサやアカエリカイツブリの調査、ドローンを用いた空撮により砂丘林の実態調査を行いました。

砂丘林を踏査した結果、ミコアイサを 2018 年に 1 つがい、2019 年に 2 つがい、2020 年に 3 つがい確認しました（図 2）。ミコアイサのつがい数はわずかで繁殖個体群の危機的な状況が続いています。2018 年、2019 年共に、雪不足・雨不足により特に海岸に近い側の砂丘林の水位が低下し、繁殖に適しない環境が増加していることが心配されます（図 3）。アカエリカイツブリもミコアイサと同様で水位低下による影響を受けており、2018 年に 5 つがい、2019 年に 7 つがい、2020 年に 4 つがいのみが確認されています（図 4）。幌延町にはほとんど湖沼が残っていないので、両種とも確認されませんでした。



図2 ミコアイサ親子（豊富町）



図3 水不足のため干上がった沼（豊富町）



図4 アカエリカイツフリと巢(豊富町) 右上

砂丘林における砂の採取状況、林の立ち枯れ状況を確認するために、2020年6月にドローンによる空撮を行ったところ、浜里地区では砂採取が行われていました。砂採取を行うと砂丘林から水が出て池ができますが、その池のなかから砂を掘り出して採取していました(図5)。砂採取により隣接する国立公園の沼の水位の低下し、干上がった沼もありました。(図6)。国立公園との境目の線の西側には最後に残された林がありました。近々すべてが失われるでしょう(図7)。砂採取跡地には近々風車が建設されます。砂丘林は秋の小鳥の渡りの重要な経路のため、風車との衝突が懸念されます。一部で砂丘林再生事業も行われていましたが、この狭い範囲の砂丘林を再生させるのにとれほどの時間がかかるのでしょうか(図8)。



図5 砂丘林から染み出してきた池の中から砂の採取(赤線は国立公園の境界) 幌延町



図6 幌延町浜里地区の砂採取場所(右)と採取跡地(中央)、干上がった沼(左) 幌延町



図7 砂採取地と隣接する国立公園の沼(右)すでに干上がり草地化した沼(右上)と風車建設イメージ(赤線は国立公園の境界) 幌延町



図8 砂丘林再生事業地(幌延町音類地区)

砂の採取により際になった林の立ち枯れも起こっています(図9)。砂の採取により水分が抜けたこと、海からの風がまともに当たるようになったことが原因として考えられます。

国立公園の際まで行われている砂の採取により国立公園内の自然環境が悪化し、その際に建設される風車により景観が悪化しますが、国立公園や国有林を管理する環境省や林野庁は区域外で行われる開発事業に対して口を出すことができません。このため、私たちのような自然保護団体が声を上げることが求められます。この問題はもともとサロベツが国立公園になった際や拡張の際にこの地区の砂丘林や海岸砂丘が国立公園に編入されなかったことが原因ですので、行政機関に対して自然環境の保全を促すことも私たちの役割です。



図9 砂採取地際の林で起こった立ち枯れ(左側はヤナギ植林)

認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク

(2) セイヨウオオマルハナバチ講習会

川崎 正大（豊富町・NPO職員）

9月13日、湿原センターでは、宗谷総合振興局の主催で、特定外来種に指定されている「セイヨウオオマルハナバチ」の監視と捕獲を体験する「セイヨウオオマルハナバチ監視活動 2020」が開催されました。



セイヨウオオマルハナバチはヨーロッパ原産の種で、国内ではトマト授粉用に輸入されたことをきっかけに、その後野生化。宗谷管内など道内で急激に分布を広げ、在来種のマルハナバチとの交雑や餌、営巣地での競争で在来種への影響が懸念されています。



画像提供：宗谷総合振興局（左）疋田葵子氏（右）

当日は、宗谷総合振興局の方にセイヨウオオマルハナバチの特徴や在来種などへの影響、また、捕獲の方法についてレクチャーを受けたほか、2012年に湿原センターの木道入り口付近で巣が発見された過去があるため、当時の駆除の状況などについても紹介を行いました。会場では標本も展示していましたので、大きさ特徴などを実感いただけと事と思います。



認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク



平成24年 湿原センターでのセイヨウオオマルハナバチ駆除作業の様子

そのほか、同じく急激な分布拡大で問題になっている外来種のアライグマの分布状況などもあわせてご紹介いただきました。

館内でのレクチャーの後は、参加者の方に捕虫網をお渡しし、木道での探索を行いました。しかし、当日は風が強い事もあった為か、ハチはおろか、虫の姿もほとんどありません。「在来のマルハナバチくらい参加者の方にご紹介したいなあ。」とっていましたので、少し焦りましたが、木道終盤でようやく国内では北海道のみに分布する在来のハイロマルハナバチを確認し、なんだかホッとしました。



今回セイヨウオオマルハナバチは見つかりませんでしたでしたが、引き続き注意深く見守りたいと思います。最後に今回の企画をきっかけにとして、身近な自然や在来種と外来生物との関係などについて関心をもっていただけますと幸いです。



(3) ONSEN・ガストロノミーウォーキング in 豊富 (フットパス)

嶋崎暁啓 (豊富町・NPO職員)

10/24(土)～25(日)に「ONSEN・ガストロノミーウォーキング／日本最北の国立公園&温泉郷で感動体験～サロベツ湿原×豊富温泉～」を、豊富町(サロベツ)で初・開催しました！※本イベントは、一般社団法人豊富町観光協会さんの主催で、当法人も企画・運営に携わっています。

「ガストロノミーウォーキング」という言葉を聞きなれない方のご説明しますと、欧米で普及している旅のスタイルで、その土地を歩きながら、地域の食を楽しみ、歴史や文化を知る旅のことを指します。そこに日本が誇る「温泉(ONSEN)」をプラスした新しい旅のスタイルが、「ONSEN・ガストロノミーウォーキング」です。



2日間の日程で開催された本イベントには19名が参加。1日目は、「サロベツ湿原センター」での木道ツアー。あいにくの荒天で、急きょ館内でのレクチャーに切り替え、最後に暴風雨の中、希望者は展望デッキまで散策し、皆ずぶ濡れになりました。それでも、参加者達からは「また来ます！」とのありがたいお言葉をいただきました。



降りしきる雨あられの中、展望デッキでの記念撮影

認定NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク

2日目は、「豊富温泉フットパスコース」を7kmウォーキング。今年の紅葉はとても綺麗！前日かなりの強風でしたが、葉っぱがけっこう残っていました。途中で3か所の休憩所が設けられ、豊富牛乳を使ったスイーツやチーズ、シカ肉などがふるまわれ、大変好評でした。



中間地点、中井沼ではチーズとシカ肉のサービス

ゴールの豊富温泉「集落センター」では、「農村生活文化伝承活動をすすめる会(通称・伝承の会)」さんの方々がスペシャルランチを作ってくださいました。「伝承の会」さんは、酪農家のお母さんたちが集まって作られた会。やさしいお味のお食事は心と体にしみじみと染み渡り、とても美味しかったです。



ゴールの集落センターでは伝承の会さんのランチ

乳製品をはじめ、山の幸、海の幸、野の幸と、サロベツの恵みを存分に食べて、飲んで、巡って、浸かって、秋のサロベツを味わった2日間。和やかでアットホームなイベントとなりました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました！



4. コラム

(1) サロベツ今昔物語

～自分の中の昭和史 (26)～

野口 多美治(豊富町・豊富町郷土研究会)

一夜明け、病院へ行くか、様子を見るかの二者択一を迫られる。結果、病院へ行くことをためらい様子を見ることにした。今考えれば愚にもつかない行動だったと思う。このような立場になった時顕著に表れるのが人間の持つ不安や弱さであるのだろう。

幸いその後嗜血することはなかったが、日々心穏やかならず二週間後、近くのクリニックで検査を受ける。診断結果は特に肺に異常は認められないことを告げられる。この際胃や腹部の状態も聞かれたが、自分としては全く自覚症状がない事を告げる。心配であるならば、一か月ごろに再受診することを勧められる。その後変わりなく学業を続けたが、体にだるさや疲れが目立ち始める。北海道育ちで都会や夏の暑さに順応できていない為なのかも考えてみたが、心落ち着かず6月中旬再受診することにした。

再診の結果、左肺上葉肩甲骨下に大きなくもりが認められ、肺結核との診断を下された。前回の受診で発見できなかった理由を尋ねたところ、初期段階の結核で鎖骨に病巣があった為レントゲン所見では診断が困難だったとの事。初期段階で発見できなかった事と自分の日常生活所作への取り組みに甘さがあったことなどを考えたとき、一層の悔しさがこみあげてくる。

さて、今の状況でどうするか冷静に行動を起こさなければならないと考える。第一に何をやるかなど順番に紙に書いてみることにした。・・・今思えば如何に混乱していたか苦笑するばかりである。(～次回へ～)



(2) とよとよみの民話

第3集 音吉の杜
北海道豊富高等学校 郷土研究部

第3話 木登りをした工藤さん (後編)

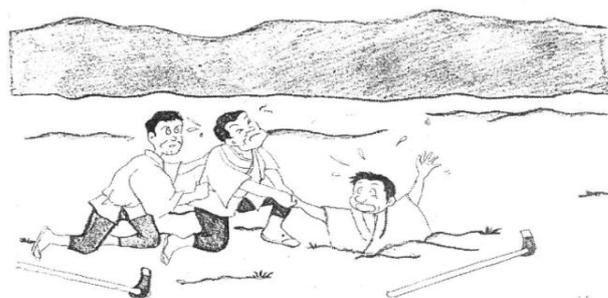
翌年、この地に新たに2戸が入植し、その後全部で30戸以上もの入植者がありました。次々と入植者が増えてくると、工藤さんは「こんなに大勢の人が入植して土地が足りるのだろうか」と心配になりました。

工藤さんは、高い松の木に登って森の奥の方を見渡しました。それほど当時の森は深いものだったのです。そこには広い大地が広がっているのが見えました。「わぁなんて広く平らな土地なんだろう。この土地ならたくさんの人が入ってきても大丈夫だ。そして皆で協力してこの土地を開墾して立派な畑にしよう。」

それから何年かして、入植する人たちが増えてきたので、工藤さんは松の木の上から見た森の奥の方へ行ってみる事にしました。しかし、ほんの少ししか行かないうちに湿地帯に入り込み、身動きが取れなくなってしまいました。広く平らな大地に見えたのでは実は大湿原だったのです。

その後、工藤さんは山形団体の皆と一緒に開拓に努めましたが、森を見渡した松の木は終戦直後まで残っており、木に登ってびっくりした様子を子供たちによく話していたとのこと。

(第3話 木登りをした工藤さん 終わり)



4. 事務局からのお知らせ (1) 湿原センター情報

早野 佳織(豊富町・NPO職員)

これまでの年とは明らかに違った 2020 年が終わろうとしています。湿原センターも春には臨時休館となり、大小あるイベントも縮小したりしながらの開催となりました。

一方、大自然へと一歩踏み出すと、そこには生まれるずっと前から変わらない風景が広がっていて、日々のニュース等の喧騒と、自然の静寂や柔らかさとのギャップを感じました。湿原や森、水辺など大自然は優しく凜とした空気をまとい、私たちをいつも大きく見届けているように思います。



秋に木道へ行くと、葉をパツパツ閉じて冬芽を付け、冬支度を早々に終えた植物たちが見られました。「備えは早めに万全に、だからこそ気持ちは平常心で。」そう言われてるような気がしました。できることをして、流れに逆らったり思いつめたりしない、それが自然界なのだろうなと思いました。



そしてふと、「植物は会話している」という話を思い出しました。自ら移動できない植物たちは、精油を蒸発させ、害虫や有害な菌、暑さなどから

身を守り、花粉を運んでくれる昆虫などを引き寄せますが、そしてなんと、「敵が来た、気をつけろ！」などと植物同士でコミュニケーションをとっているという説です。ヒト科の私たちは、それよりは大人っぽく、こういう時だからこそ、まわりの人たちと何気ない会話を短い時間でも心を込めてしたり、優しく目配りしたりしていきたいなあ…と思いました。



季節は巡り、今年も冬がやってきました。サロベツの冬は本当に厳しい。でも、雪国の一番美しい季節は冬だとも思います。

冬はつとめて。純白の雪上に雪の結晶がそのまま落ちてキラキラ輝いているさまは、いとをかし。青き針葉樹林に雪がこんもり積もっているさまも、いふべきにあらず。風雪の流れるさま、樹霜のきらめき、冠雪の利尻富士は雄々しく神々しい。

サロベツの冬は、ダイナミックで繊細で、特別な美しさがあります。そして、すべてが停止したかのように見える極寒の世界でさえ、その後には必ず春がやってきます。

湿原センターの木道が新しくなります！

湿原センターの木道は本年 11/20～来年 2/20 にかけて、木道の老朽化に伴う改修工事を実施中です。期間中は一部区間が通行止めとなる為、お客様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力の程よろしくお願いいたします。なお、雪が十分に積もればスノーシューなどを用いて木道以外でも散策できます。詳細な積雪情報などはサロベツ湿原センター（電話：0162-82-3232）までお問い合わせください

(2) サロベツ四季の旅

秋の柔らかな光が湿原を大きく優しく包み込む。木道からは人影が消え、湿原からも生き物の気配がすっかり消えた。聞こえるのは風の音と、サラサラと揺れてこすれ合う草の乾いた音…。人によっては寂しく映るかもしれない晩秋の湿原だが、長年見続けていると独特の心地よさを感じる。木道を歩くと風は刺すように冷たいが、澄み切った青空と金色の湿原が創り出す景色は、絵画のようだ。



風に揺れて優しく輝くヨシの穂

センターの周りで雪虫がたくさん飛んでから少し経ったある日、今年最初の雪が降り積もった。前夜から一気に冷え込み、朝目覚めると、カーテン越しでも妙に明るい。やけに静かで、すぐに雪が降ったのだと気付いた。

根雪にはまだ早いので、日が射すと木道や湿原に積もった雪はその日のうちにとけて消えてしまった。だが、朝のうち、黄金色の湿原に薄っすらと積もった純白の雪は本当に美しかった。この時期にしかみられない、「秋と冬の間のひと時」を感じられる光景だ。彼方に見える利尻山は麓の方までだいぶ雪化粧が進んだ。海岸線ではそろそろ海ワシたちが渡ってくることだろう。

足元では植物たちが冬支度を終わらせて、静かに眠りについている。湿原が完全に雪に覆われるのはまだ少し先。それまで、雪は降ったりとけたりをくり返しながら、いよいよサロベツは本格的な冬へと向かっていく。

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークとは？

当法人は、サロベツ及び周辺の自然と地域を愛する人々が集い、自然環境の保全活動、調査研究活動及び環境教育活動を通して、自然と人間との共存の大切さを広く啓蒙し、併せて地域の発展、まちの活性化に寄与し、サロベツ及び周辺の豊かで美しい自然を次世代に引き継ぐことを目的として平成16年5月に設立されました。

活動の目的にご理解いただき、共に汗を流し、ご協力下さる会員を随時募集しております。あなたの参加が活動を支えます。どうぞご加入ください。

会員になっていただける方は事務局までご一報下さい。申込方法と会費の振込先をご連絡いたします。また、会の運営を支えるご寄附も随時受け付けております。(3千円以上のご寄附は各種税控除の対象となります。詳しくは事務局まで。)



<12月10日現在の会員数>

正会員 72名 / 賛助会員 27団体・13個人
サポート会員 124名 ⇒ 計 224名・団体

※転勤などでお引越しをされた方は、住所変更のご連絡を事務局までお願いいたします。(連絡先は表紙の上部に表示しています)